
リライフ

おじい

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リライフ

【Nコード】

N1341L

【作者名】

おじい

【あらすじ】

命の危機に頻した私は、突如宇宙からの未確認生物に地球から連れ去られた。

知らない星での生活は、恐怖や不安とともに、大切な人たちや思い出がいつぱい詰まった故郷で、これからもずっと暮らしたいと思っていた私にとって、それはとても悔しくて、早く帰りたくしかなかった。

やりきれない思いを胸に、私はいつか地球に帰れることを信じて、知らない星で第二の人生をスタートするのだった。

15歳以上の方を対象年齢の『目安』にしています。

ツチウラサクラ

「これから高浜君と一緒に借りてたCD返しに行ってもいいかな？」

どんより薄暗い曇り空、少しひんやりした秋の夕方は、妊娠八ヶ月目に入った私の気持ちを沈ませていた。

そんな折、学校の同級生で私の大切なお友達、かんだつ ゆきの神立雪乃さんと、たかはま なつ高浜夏くんが訪ねて来てくれるとのメールはとてもありがたくて、心がほっと温まる。

私は二人の訪問を心待ちにしながらリビングのソファに腰掛け、ニュース番組を見ていた。

「彼等は今、何処へ？」

当時十七歳だった神奈川県在住の友部水希さんともへみずきが行方不明になって今日で丸一年。彼女のみならず、世界各国で若者を中心に行方不明者が続出し、報告されているだけでも100名を超えています。各国の警察が連携し全力を挙げて捜索に当たっていますが、未だ一人として見付かっていません」

きりりと整った顔立ちをした中年女性のキャスターが伝えたトッブニュースは、世界中を恐怖に陥れている行方不明者続出事件。友部水希さん他、世界中で若者を中心に行方不明者が続出している。

何処かの国が企んだ拉致事件という見方が強いが、彼女が行方不明になって丸一年経過した今日に至っても未だ真相は掴めていない。そのため拉致を恐れ、外出する若者が減り、街はやや閑散。経済界

にも影響を与えている。

友部さんが姿を消したのは私が住む茅ヶ崎（ちがさき）市から離れたやや大きな街。あの日も雨が降っていた。

目撃者によると、地下街から駅へ続く階段をやや速足で上っていたところ、前方を歩く中年女性が歩調に合わせ手を振っていたのか、急に傘を横に突き出し、追い抜きざまそれに躓き、後方に転倒しかけた瞬間、姿を消したという。目撃者は、にわかには信じ難い光景を連日続く残業に伴う疲労による幻覚と思い込んでいたが、テレビの報道で友部さんの顔写真が公開されたのを見て、早速テレビ局に一報を入れたという。

ピンポン！

あつ、二人とも来たのかな。

インターフォンで応答し、二人をして玄関へ向かい扉を開ける。

「いらっしやい、二人とも、来てくれてありがとう」

「ん？ どうして？」

「お礼を言うのは桜ちゃんにCD借りてた私のほうだよ」

「ううん、私、最近ずっと家で一人ぼっちだったから、二人が来てくれただけでなんだか心が晴れたの」

「それは良かった。来るだけで良いならいつでも来るよ?」

「うん、寂しくなったらいつでも呼んでね」

「ありがとう。今度改めてお礼させてね。さあ、玄関で立ち話もな
んだから上がって!」

雪乃ちゃんと夏君は、お互いに控えめな性格で、両想いなのにな
かなか気持ちを打ち明けられないでいる。二人を見ているこちらと
しては、とてももどかしくてむず痒い。

雪乃ちゃんはまるで絵に描いたような大和撫子で、大人しいけれ
ど気立てが良く、クラスでも人気者。肩までかかったセミロングの
綺麗な黒髪も魅力の一つ。私は肩甲骨の辺りまで伸ばしている以外
は同じ髪型だけれど、色素が少し薄く、正直なところ雪乃ちゃんが
羨ましい。

夏君は、爽やかなスポーツ刈りと、誰にでも分け隔てなく謙虚な
姿勢が女の子に人気。男の子にも人気といえば人気だけれど、から
かわれる事が多い。本人は女の子にモテている事に気付いていない
様子。でも意中の人が居るならば、殊更勿体なくはない。問題なの
は、雪乃ちゃんにも気を寄せられている事に気付いていないところ。
私が二人にお互いの気持ちを伝えるのは簡単だけれど、それは何か
違う気がするので、敢えて何もせずに様子を窺っている。

私の妊娠が発覚して学校を自主退学してから二人にはとてもお世
話になり、迷惑をかけっぱなし。ちゃんと恩返ししなくちゃ。

二人をリビングに招き入れ、ソファーに座ってもらう。私はお茶
を淹れるためとキッチンへ向かおうとしたその時だった。

「うつ！？」

突如私の腹部をかつて感じた事のない目眩を伴う激痛が襲った。あまりの痛みに耐え切れず、その場にドサツと倒れ込んでしまう。

「土浦さん！？」

「桜ちゃん！？」

二人が同時に呼びかけた。

「救急車呼ぼう！！」

即座に着用しているジーンズからケータイを取り出した夏君は、大人しい草食系男子とは思えないほど懸命に、手と声を震わせながらケータイを握って、それでもハキハキした声で通報してくれている。

かっこいい…。こういう人のことを本当の『王子様』っていうのかな。

雪乃ちゃんが好きになるの、分かるなあ。

苦しくてしかたないのに、何故かこういう事は考えられる。

「うつうつつ、あぁっ…」

二人の呼びかけに応えられないほど、痛みと目眩はどんどん激しさを増し、意識が遠退いてゆく。

苦しいのに、なんだか眠くなってきた…。

頭から、何か抜けてく…。

私、このまま死んじゃうのかな。

「桜ちゃん！！　しつかりして！！　頑張つて！！　いま夏君が救急車呼んでるからね！！」

だめ、死んじゃだめ！！

私が死んだら赤ちゃんも死んじゃう！！

私にはずっと一緒に居たい人たちが居る！！

だから…。

死にたくない、死にたくない！！　まだ死にたくない！！

生きなきゃ、生きなきゃ！！

なのに、なぜ？　なぜなの？　この走馬灯は、一体なぜ？

これまで生きてきた私の軌跡が次々と蘇る。

ああ、色んな事、あつたなあ…。

近くの海で、お砂のお城を造ったり、ピアノのお稽古をしたり、中学生になって、内気な私でも、お友達とたくさん遊ぶようになって、高校生になって、好きな人ができて、それで…。

しかし、その先には思わぬ困難が待ち受けていた。悲しみ、怒り、絶望……。負の感情を次々と覚える出来事だった。

それでも、私は自ら命を絶てなかった。

全てを背負わされた私には、これから幾多の苦難や困難が待ち受けているかもしれないけれど、それを乗り越えて生きようって、決心した。

なのに、私、死んじゃうの…？

酷いなあ、残酷だなあ、神様は…。

意思とは裏腹に、遠退く意識に抗えず、私は眠ってしまった。

ツチウラサクラ（後書き）

この物語は、私が小学一年生だった約14年前に考えた物語をベースにして執筆したのですが、まさかそれをこうして公開する日が来るなんて、当時の私は想像していませんでした。しかしあくまでも「ベース」にしたままで、内容もジャンルも異なります。オリジナルにつきましては別途公開を検討しております。

ツチウラサクラ2

…。

あれ？ 私、助かったの？

気が付くと、私は手術台のような台の上で仰向けになって寝ていた。

ここは病院の手術室なのかな？

生きているのか確かめるために手を握りしめると、指はしっかり掌を圧迫した。

生きてる、私、生きてる！！

続いて周囲を見渡すため頭をまず右へ動かすと…。

「んっ…？」

なんだろう、ミニブタさんかな…？

いやいや、なんで病院にミニブタさん！？ しっかりしなきゃ私。

これは夢、うん、そうよ、そうに違いないんだから。なんだか身体が軽い気がするし、^{っね}抓っても痛い！！

痛い…。

私が寝ている台を、ピンク色の毛に被われたブタさんの様に丸い見知らぬ生物たちが、手術中の医師のように私が寝ている台を囲んでいる。

この奇妙な動物さんの存在が目の中の現実を信じ難いものになっている。

この光景をいまひとつ受け入れられず、何度か大袈裟なくらいにパチクリ瞬きをしながら、再度状況を確認する。

うーん、やっぱり夢じゃないみたい。という事は私、生きてるんだ！！

ミニブタさんたちの見た目は体長50センチメートルくらいで、牛と豚を足して2で割ったような顔つきで、犬歯が剥き出しになっている。

胴体は尻尾が無い事を除けば殆ど豚そのもので、手足には馬に似た蹄がある。よく見ると踏み台に乗っかって私を囲んでいる姿が愛くるしい。

「やあおはよう！ 49日ぶりのお目覚めだね。起きて早々悪いけど、キミ、このまま死ぬ？ それとも違う世界で第二の人生を始めるかい？」

謎のミニブタさんの一体が陽気に話しかけてきた。

ミニブタさんが喋った！？ という驚愕はさておき、49日間も眠

つていたという事や、違う世界で第二の人生をという提案の方が仰天ものだ。唐突にそんな事を言われても困惑してしまう。

日本語が通じるようなので、起き上がってミニブタさん（仮）に恐るおそる問う。

「あの、違う世界で第二の人生とは…？」

「ああ、それはつまり、ウチ等の星で生活してもらってこと。

大丈夫、キミと同じ地球で暮らしてた日本人の先住者も結構居るし、キミに働く気があれば、就職出来るまで協力するから生計も問題ないよ〜ん。

それになんと住居までウチ等が用意しちゃうからホームレスにならない！ う〜ん、我ながらなんて良心的」

「あの、でしたら、死を選んだらどうなるのでしょうか？」

「キミをこのまま宇宙船から放り出して棄てるよ〜ん」

やっぱりここは宇宙船なんだ。外は見えないけれど、目が覚めてミニブタさんを見た時からなんとなく察していた。それにしても、宇宙船から放り出して棄てるなんて、丸くてちょっと可愛いくせに恐ろしい事をルンルンと言う。

ミニブタさんの姿を見た時からなんとなく推理していたけれど、状況からして、私はつまり…。

「地球で多発してる行方不明者続出事件の真相って…」

「うん、ウチ等が地球人を連れてつてるよ〜ん」

やはりそうでしたか。

「酷い！！　なんて事するんですか！！　あなたたちのお陰で地球は大混乱なんですよ！？　早く今まで拉致してきた人たちを地球に帰して下さい！！」

人々を混乱させている行方不明事件の実行犯が目の前に居ると確証された途端、私は感情を抑えられなくなり、これまで出した事のなほほど大きな声を船室いっぱいに響かせた。

やつぱり悪い奴なんだ。地球の人々を拉致してるなんて、酷過ぎる。どれだけの人が悲しみ、恐怖に怯えながら日々を送っているか分かってるの！？

「地球に帰す？　そりや出来ないね。今まで連れ去った人々は、キミを含めてその日限りで地球を去る運命だったんだから。つまりキミは今日、もう死んでる筈の存在なんだよ〜ん♪　死にかけたキミをウチ等が救命して生き長らえたんだからラッキーじゃんか」

何それ！？　一体どういう事？

「死んでる筈の存在ってどういう事ですか！？　何か根拠でもあるというの！？」

「根拠というか、君の世界の神様と協定結んでるからさ。その辺は後で説明するよ〜ん」

「神様と協定！？ あなたたちは宗教団体ですか！？ そんな説明で納得出来ると思ってるのですか！？ ずっと生まれ育った地球を離れるのがどれだけ辛いのか、あなたたちに分かります！？」

本当にもう、地球には帰れないの？ 眠る前まで一緒だった雪乃ちゃんにも夏くんにも、誰にも、誰にも会えないの？ そんな、そんなのって…。

「絶望に暮れたような顔してるね。でもキミは生きてるんだから、まだ希望が持てるだろう？ ウチ等が救命活動で助けられる人は稀なんだからさ。ぶっちゃけ、助ける前に殆どの人が死んじゃうんだよね。彼らの分まで生きてやってちょ！」

そう言われると、返す言葉がない。私はもう助からないと思った。死は宿命で、雪乃ちゃんと夏くんに看取られて、あの世へ旅立てるだけでも幸せだと思った。

生きたくても生きられないって思った。

でも、奇跡が起きた。彼らが死の淵に立たされた私を救ってくれたんだ。

「そう、ですよ…。この身体が、命があれば、希望はまた持てますよね。助けていただいたのにご無礼を働いてしまい、すみません。それと、助けていただいて、ありがとうございます」

私が彼等に救われたのなら…。

「私の命が救われたのなら、あの子の命も救われたのですか？」

その言葉に半分ずつ、不安と希望を込めた。

「あの子？」

「そうです！！」

「ああ、あの子か。それは、残念ながら」

「そう、でしたか…」

それを聞いて、悔しさと喪失感が込み上げてきた反面、少しホツとしてしまった自分がいた。それは事情が事情といえは世間は納得する理由かもしれないけれど、そんな自分がとても卑しい。

「ウチ等が迎えに行った時、キミはあの子を流産した後みたいで、既に命はなかった。死者蘇生は地球より文明が進んだウチ等の技術でも不可能なんだよね」

「…」

命の灯が消えたというのに、私は自分でも意外と思うくらい冷静だ。

「こんな時に悪いけど、キミは以前、生きる義務を放棄して自殺しようとしたね」

「えっ！？」

ミニブタさんが私の過去を知ってる！？

確かに私は以前、訳あって自殺しようとした。しかし、それには至

らなかった。

「もしあの時、キミが自殺してたら、ウチ等はキミに第二の人生を用意出来なかった。これは、キミの世界の神様との協定だよ〜ん」

「また神様との協定ですか？」

「そうだよ〜ん。協定についてはさっき言った通り後で説明するとして、キミはこれからウチ等の星で第二の人生を始めるか、それとも宇宙のゴミクズになってもらうか決めてもらうよ〜ん。後者を選んだら説明する必要ないし。さあどうする？ 生きる？ 死ぬ？」

ゴミクズって、このミニブタさん、お星さまになってもらうとか、柔らかな表現は出来ないのかな。

「まだお星さまにはなりたくありません。よろしければ、あなたたちの星で生活させて頂きたいと思います」

生きていれば、きっといつか地球へ帰れる。そんな希望がゼロではなくなる。だからとりあえず、生きてみよう！

「はいよ〜ん、じゃあキミをそのまま連れてくからね〜」

ミニブタさんは表情一つ変えず、二つ返事した。

別のミニブタさんが言った。

「あとウチ等、地球という豚よりは牛に近いからそこントコよろしくね〜」

「えっ？ 牛さんだったのですか。すみません。失礼しました」

ブタさんみたいな格好してるくせに」。

「あ、いや、うん…」

「本当に失礼しました」

「まあ気にしないでいいよ」 それに、牛って言っても牛じゃないし、そもそも哺乳類じゃないし。それじゃ、おやすみんみんぜみ」

「えっ？」

哺乳類じゃないの！？ お乳出ないとカルビになっちゃうよ！？

「あつ、おやすみなさい」

言って、彼らは私を残し、この広い手術室のような部屋から出ていった。

セミ、知ってるんだ…。

おやすみんみんぜみと言われても、正直なところ不安と混乱でどうにかなってしまいそうで、とても眠れる状況ではない。

地球に沢山の悔を残した私の未来には、一体何が待ち受けているのだろう？ そして、地球に生還出来る日は来るのだろうか？

「おはよウジムシ。さうて、そろそろ星に入るよ〜ん」

「おはようございますー！」

モーニングコールがウジムシって…。

あ、私、いつの間にか眠ってたんだ。

謎の生物さんに起こされて、窓辺まで案内された。外に広がるのは、まるでカフェオレにココアパウダーをトッピングしたような色をした茶色い天体。この茶色いものがオゾン層で、宇宙からは地表が見えない。

オゾン層を抜けると、青い海や緑の陸地が広がっているのが見えてきた。海が青いということは、恒星の青い光がオゾン層を突き抜けているという事だろう。

「凄い」

その景色に、私はただ圧巻され、ワクワクしていた。初めての海外旅行で間もなく目的地に着陸する飛行機から異国の地を見下ろした時の感覚が更に強くなったような感じ。身近なところでいえば、トンネルを抜けた先に、辺り一面の雪景色が広がっていたり、ビルが建ち並んでいたりと、さっきまで居た場所とはまるで違う世界が広がっていたというところだろうか。

「着陸体制に入るから、椅子に座ってシートベルト締めてね〜」

「あつ、はいっ！」

そこに居る全員が素早く着席し、座席横のひじ掛けにあるボタンを押して、シートベルトを締めた。

彼らは私たち人間と違って五本の指を使えないので、ボタン一つで動作するシステムは画期的だろう。

そう考えると、この椅子や宇宙船はどうやって造られたのだろうか？

考えているうちに、宇宙船は時計回りに旋回を始め、傾いた。いよいよ、新しい人生の舞台に着陸だ。

ワクワクしながら、しかし地球を思い出して切なくなったり。二つの感情が私の胸を締め付けて、少し泣きたくなった。

ツチウラサクラ3

私たちを乗せた宇宙船は、いよいよ新しい人生を始める星、フンガ星の地に降りた。

宇宙船は、飛行機の着陸と同様に滑走路を文字通り滑るように走りながら、徐々にスピードを落としていく。

窓の外には滑走路や他の宇宙船、この離着陸施設のものと思われる建物以外は、ただ草原が広がっているだけの開けた場所のようだ。

まもなく宇宙船は50日間の長旅を終えて停止。機体はきつと小さなデフリと何度もぶつかって傷んでいるだろう。

停止してから数秒して進行方向左側の扉がスライドして開いた。

「さーて、着いたよーん。重力は地球とほぼ同じだから、今で通りの案配で立ち上がってオツケーだよーん」

「は、はいっ」

私は少々動揺しながらミニブタさんの誘導に従って宇宙船を降りた。

宇宙船と建物を繋ぐ通路には飛行機と空港を繋ぐ通路と同じような屋根があり、地に降り立った実感がない。まるで初めて異国の空港に降りた時のような、なんとなく、到着したんだなという感覚だった。

建物の中に入ると、

『ようこそフンガ星へ！』

と白い地に丸みがあるゴシック体の青い文字で横書きされた大きな幕が、ガラス張りの20メートルはあるであろう高い天井から垂れ下がっていた。私は成田空港にある赤と青のゲートの案内幕を思い出した。

この星で初めて見た文字は、その幕に書かれた地球の日本語だった。本当にここは『フンガ星』なのか、実は地球なのではないかと思えるくらい違和感がない。

しかし辺りを見渡してみると、やっぱり違う、ここは地球じゃないんだと実感した。

辺りに居るのはミニブタさんばかり。そこに人間の姿はなかった。響き渡る喋り声も、人間の声より1オクターブくらいトーンが高い。

そういえば、このミニブタさんには私たち『人間』と同じように、『フンガ』という和名があるらしい。

漢字で表記すると『糞我』。

我はクソだ！ どうだ凄いだろ！ とでも言いたそうな名前だけど、失礼なので突っ込めなかった。

呼び方はフンガ星の万国共通で、ラテン語の学名も同様に『フンガ』と発音する。

この星にも漢字とかラテン語あるんだ…。

ちなみに他の生物、例えば魚や虫も、身体の構造はそれぞれ違っても、頭だけはフンガの頭と同じ形をしているという。

だからこの星の名前は『フンガ星』なのだ。

単純だなあ。

そのまま私は地球から連れ添ってくれたフンガさんに窓口に連れて行かれ、椅子に腰掛け、机越しに住民登録などの手続きや、この星で生活するにあたっての説明を受ける。

「えーと、遅ればせながら自己紹介だけど、ボクチャンは、この宇宙旅行や宇宙港^{うちうちうちうち}、宇宙船その他諸々を管理、運営する『ステラーエクスプレス株式会社』で乗組員のバイトをしてるマヌケ フガオだよーん」

ボクチャン！？

バイト！？

乗組員がバイト！？

いいのそれ！？

ツッコミ所満載ですよ！？

名前はマヌケ フガオさんっていうんだ。

それにしてもマヌケって…。

ぷっ…。

「苗字がマヌケで、名前がフガオさん、ですか？」

「そうだよ〜ん」

間抜けな一族なのかなあ。

「ちなみにボクチャンの本業はタレントだよ〜ん」

タレント！？

タレントがバイトで乗組員やってるの！？

もしかしてフガオさん、あまりタレントのお仕事ないのかな？ だ
からアルバイトしてお金稼いでるのかな？ フンガ星でも芸能のお
仕事って、大変なんだ。私は芸能人じゃないから分からないけれど。

でも、宇宙船の乗組員がアルバイト社員だなんて、おかしいと思う
のは地球人だからなのかしら？

私は恐るおそる質問してみた。

「あの、フガオさんはなぜ乗組員のアルバイトをされているのです
か？」

すると、フガオさんはスターの貫禄漂う、瞼のシワと瞳の奥に何か

深いものを秘めたような秘めていないような渋い顔をした。

「ああ、じゃあキミの住民登録手續が終わったら話すよ。フンガ星の大スター、マヌケフガオの感動秘話をね」

後ほど、私は大スターの驚くべき秘密を知ることになる。

ツチウラサクラ4 & マヌケフガオの武勇伝

フガオさんに続き、私の自己紹介を一通り終えた所で、彼(?)は机の下からA4サイズの紙を取り出した。

「さうと、とりあえずこの紙に地球での住所と名前に生年月日、あと性別の欄にマルつけて、印鑑の代わりに指を朱肉に着けて氏名欄の右隣りにある指紋の欄に指紋をべったり付着させてね。それと、就きたい職業があつたら備考欄に書いてね」

どうやらこの紙の記載事項に基づいて住民登録手続きを行うようだ。備考欄には、小さい頃から懂れていた、『ケーキ屋さん』と書いた。

「はい、これでいいですか？」

「え」と、地球での住所は神奈川県 茅ヶ崎市 ちがさきし ひがしかいがん 東海岸、名前が土浦 ツチウラ 桜、1988年4月29日生まれ、女、はいオツケーだよ。まあこれから、ウチ等にとっては短い付き合いかもしれないけど、キミにはとっては長い付き合いになると思っからよろしくね」

「はい、こちらこそ、よろしく願います！」

「ほい、じゃあこれからキミが住むこの国について説明するよん」

「はい、願います」

「この国の名前は『日本王国』にほんおうこく っていうて、王が主権を握る王国なんだけど、この国の国王は、ボクちゃんとは腐れ縁の『トノサマフ

ンガ』だよ〜ん」

『王国』のトップが『トノサマ』なんだ。『王様』じゃないんだ…。

それに、タレントのフガオさんと国王が腐れ縁って、つまり友達ってこと？

やっぱり地球の常識は通用しないのかな？

「トノサマフンガとは後で会ってもらうとして、折角だからここでボクチャンがバイトを始めたきっかけとなった、後世に語り継げる武勇伝を話してあげるよ〜ん♪」

もちろんサクラもこんな武勇伝の持ち主と知り合えた事を誇りに思っているからね〜」

フガオさん、そんなに凄い事したのかな。私は少しワクワクしながら彼の話に耳を傾けた。

マヌケフガオ、職業、タレント。年収、三千万円前後。物価は地球の日本と同じ。

街はクリスマスモードで賑わっていた給料日、ボクチャンは自分へのクリスマスプレゼントとして一儲けしようと、生まれて初めてパチンコ屋に行ってみた。

ちなみに『ボクチャン』という表現、地球では変わった言い方だけど、フンガ星では地球人の『私』くらいごく普通に使われる一人称

だから気にしないでね。

パチンコ屋の自動ドアが開いた途端、パチンコ玉のジャラジャラした音や、騒音と化した音楽などが全身を被^{おお}った。

市街から少し外れた古い店だけど、さすが地域一番の出玉提供店。殆どの台が客で埋まっ^ていて、座席の横には玉がぎっしり詰まったケースが幾重^{いくえ}にも重なっている。

よし、今日は台の設定が緩い日だ。これなら勝てるぞ。

ボクチャンはそのまま真っ直ぐ進み、空いていた中間左側の台に勝負を挑んだ。

フンガの手足は人間のよう^にに五本の指ではなく、かなり短足ではあるが、構造は馬の脚そっくりだから、『押す』以外の動作は難しい。そのため、地球のパチンコ台のようにレバーはなく、全てボタンで操作する。

ではパチンコメーカーはどうやって台を製造しているのか、それは追いついて分かるよ〜ん♪

初心者のボクチャンは、とにかくボタンを押しまくる。現段階で既に五千円スツているが、年収三千万のボクチャンにはそのくらい端^{はし}金^{たがね}、気にせずお金を注ぎ込み続けた。

一昔前は、口で啜えて払っていたお金だけど、つい数年前に静脈認証やDNA情報での支払いが可能になり、財布をぶら下げる必要が全くなくなった。

そのためか金銭感覚が麻痺し、みるみる所持金の数値が下がっていく。

いつの間にか五万円ほど使っていた。

しかし、殆ど玉が出ない。左右隣の客たちは玉のタワーが出来てるというのに。

なんだかイライラしてきたので左肩に挿してあった葉巻を吸ってみる。フンガ星の葉巻やタバコは、吸うと勝手に点火する仕組みになっている。

「お客様、店内は禁煙です。喫煙はご遠慮ください」

「うるせーばか、こっちは今 集中してんだよ！」

ガシャン！

ドラえもんより掠れた声を出す、店が所有するステンレス製の『ロボットフンガ』がボクチャンの集中を妨げたので、左足で一発蹴ってやった。

「ろろろ、店内での暴力行為！！ イエローカード！！ 三万円、没収！！！」

イエローカードが三枚貯まるか、レッドカードを一枚でも貰った場合、貴様^{キサマ}を厳重に対処致しますのでご承知ください」

言っと、ロボットフンガはボクチャンの身体に触り、勝手に三万円分のマネー情報を吸い上げた。

宇宙より寛大な心を持つボクチャンの堪忍袋の緒がついに切れ、ロボットフングを一喝してやることにした。

「テメエなにしゃがんだこんにやるー！！　こうなったら再起不能にしてやるーっ！！」

ボクチャンはその場でロボットフングをボコボコに殴り、終いには椅子の上に二足で立ち、ジャンプして跳び蹴りしてやる事にした。

「オッラアアアア！！」

バシンッ！！　ガシャンッ！！

プシューッ！！

ピピッ！！　ピッ、ピッ、ピピッ！！

ロボットフングは煙を吹いて無線のような変な音を立て、そのまま倒れた。

ボクチャンはついでにパチンコ台も跳び蹴りしてぶっ壊し、大量の玉を獲得した。

騒音に包まれた店内、ボクチャンの反抗に気付いた店員はいない。

スッキリしたボクチャンは、意気揚々と玉のタワーを背中に載せ、カウンターに持って行った。

そこで、事件は起きた。

マヌケフガオの武勇伝2&ツチウラサクラ5

大量のパチンコ玉をカウンターに持って行くと、さっきぶっ壊した
ものとは別のロボットフンガが応対した。

「お客様、まず、住民登録情報の確認を行いますので、こちらの端末機に身体の何処かを触れて下さい」

ボクチャンは言われるまま、地球でいうエディ^{エディ}やスィカ^{スィカ}の決済端末機のような形をした、DNA認証装置に右手を触れた。これで居住地の役所に登録された住民登録情報との照合をインターネットで行う。

ピピッ！

という音がして、確認は一秒で終わった。

「はい、認証されました。それではお客様、こちらへ起こして下さい」
ロボットフンガは、カウンターの後ろにある暖簾^{のれん}の方にボクチャンを誘導した。

向こうの様子は真っ暗で見えないが、きつとこんなに大量の玉をゲツトしたので、大量の景品や現金を渡すため、他の客の目を避けているものと理解し、そのまま付いていった。

辿り着いた場所は応接室。真っ黒な革製の大きなソファァーが対面し、その間に白い大理石で出来た長方形のテーブルがある。

そして、それを見下ろすように、店長の物と思われるソファーと同じ革製の、回転式で背もたれがやたら高い椅子と、それとは相反して緑のざらざらしたマットの上に透明のビニールマットを敷いただけの、古くて質素な事務用デスクがある。

「まもなくスタッフが参りますので、少々お待ち下さい」

ほんの暫く待っていると、サングラスを掛け、胴体は黒装束のフンガが四匹ほど現れた。

まずい…。

ダラダラダラダラ…。

ボクチャンの全身から冷や汗が結露^{けつろ}のように滴り落ちる。

明らかに換金やら景品交換といった雰囲気ではない事くらい、パチンコ初体験のボクチャンにだって解った。

普段、裸で生活しているボクチャンたちフンガが、わざわざ衣に身を包む理由は一つ。何かに所属している事を示す制服だ。

そして、黒装束を身に纏う職業はたった一つ、所謂^{いわゆる}ヤク○さんだ。

黒装束の一匹が渋い声と表情で言った。

「いや、お客さん、タレントのマヌケフガオでしょう？ 玉いっぱい出たね」

ん？ なんだコイツ、ボクチャンが色々ぶっ壊したの知らないのか。ならさっさと貰うもん貰って帰ろう。

「そつだよーん」 だから早く換金してね」

要求すると、何かがボクチャンの横をスツと掠め、左頬の毛が舞い散った。見ると、正面に居る黒装束のトップが発するオーラは、たった今までとは比べものにならないほど黒くなった。

左に振り返り、背後の壁には、1センチ程の穴が空いて、そこから僅かに煙が出ていた。

だ、弾丸だ…。

下から読んでも『だんがんだ』…。

そ、そんな事考えてる場合じゃない。

な、なんてこたーっ（なんてこった）！！

これはまずい！ まず過ぎる！！

ボクチャンの下の方から、あのガリバーが火消しに使った液体がジヨビジヨビジヨバジヨバ。足元の本革絨毯がみるみる汚染されてゆく。
ほんがわじゅたん

「おいテメエ、店のモン可愛がってくれた上にこの最高級絨毯に潤いを与えてくれるたあ、随分ありがてえじゃねえか、あん？」

「だ、だろ？ 超ぶえぶ、VIP候補だろ？」

全身の震えが止まらず、言いながらも呂律ろれつが回らないし、自分で何を言ってるのか訳がわからない。

「じゃあそのお返しはしっかりしなきゃあなあ？ ああ！？」

黒装束の剣幕に腰を抜かした。

「ど、どんなお、おゝ返しを、し、しゝてくれ、るのお？」

「そうだなあ、タレントだから命までは許してやらあ。その代わり、テメエが可愛がってくれた奴らに御小遣いをくれねえか。そうだな、負けに負けて三百万で今回の件は清く水に流してやらあ」

すると、強制的に端末機に身体をタッチさせられた。

ピピピピピピピッ！！

端末機が赤く点滅した。残高不足だ！！

「おう、足りねえじゃねえか。まあ持っていないモンは仕方ねえ、ツケといてやんよ。その代わり、テメエが払う利子は三百倍だ」

すると、残りの黒装束三匹が大声でハモった。

「お利息三百倍、ごつつぁんです!!」

「お前ら三匹、それ言うためにここに居たのか!？」

三匹はまたハモった。

「いえ!! お客様が逃げようとした時に弾丸を使用して負傷させずとも取り押さえられるよう、こちらに参上致しました!!」

なるほど合理的。

「て、っていうか、さ、三百倍? 九億円? いくらリッチなボクチャンだって、例えば宝くじが当たっても、そ、そ、そんなに、は、払える訳ないじゃないか。そ、それに、玉を出さないそっちにも、おおお、落ち度は、あ、あゝるんじゃないの?」

震えながら、それでもやっこの思いで搾り出した言葉。

「玉が出なきゃ台移動すりゃいいじゃねえか? あん?」

全くその通りだ。返す言葉がない。

その後、黒装束が契約書を差し出してきた。サインを書いて肉球を朱肉に付着させて押すように言われた。

それを拒否したら塩酸より強い王水おうすいという液体を手足にかけてじわじわ溶かすと言われたので素直に指示に従った。

こうしてなんとか店から解放された。

しかし！！　それで黙っているボクチャンではない！！　利子三百倍なんて明らかに法外だチクショー！！

その足で弁護士事務所に行き、後日パチンコ屋を訴えてやった！！
だがなんと、そこでパチンコ屋は無罪半尻^{ケツ}、じゃなくて判決となつてしまった。

オマケにパチンコ屋が黙っていてくれた、ロボットフンガやパチンコ台をぶっ壊した事実が露見し、ボクチャンは器物損壊罪で懲役三日、その上、明らかに法外な利子三百倍はそのまま、そのうえ弁護士費用や訴訟費用まで払わされるハメになってしまった！！

ちつくしょーっ！！

こういうのを理不尽っていうんだこんにやろー！！

それは国内外で大々的に報道され、新聞では一面を飾るという名誉を得た。

「その時の新聞がこれだよーん」

フガオさんは、当時の新聞を私に差し出し見せてくれた。

『マヌケフガオ、パチンコ店で大暴れ！！ 台やロボットフンガ破損で借金9億！！ 訴訟で自爆！！ 墓穴掘り逮捕！！ 懲役3日！！』

「はあ……」

フガオさんには悪いけど、呆れて言葉が出ない。

「どうだ、新聞の一面飾るなんて凄いだろ？」

これが乗組員のアルバイトに励む理由だという事は解った。

しかし、こんな事で新聞の一面を飾って誇れる神経は、私には到底理解し得なかった。

タレントの仕事が少ないとか、複雑な事情があってアルバイトをしているのかと思っていたのがっかりした。

私だったら恥ずかしくて、この星みたいに誰も知っている人が居ない所に逃げ出したくなると思う。

…そうだ、ここには私を知っている人が誰も居ないんだ。

思うと急に胸騒ぎがして、寂しさや不安が涙腺に滲んできた。

ツチウラサクラ6

フガオさんのお茶目な話を聞いた後、私たちは宇宙の玄関口、宇宙港^{こう}から街中へ向かうため、タクシーに乗った。

いまのところ、宇宙港からの公共交通機関はタクシーのみだそうだが、近い将来、フガオさんがアルバイトしている民間宇宙施設会社の『ステラーエクスプレス』がタクシープールと乗り場の混雑緩和と、低価格な移動手段の整備により宇宙港の利用者を増やすため、その敷地内に市街と連絡する線路を敷設して鉄道会社に貸し出し、駅を開業する予定らしい。

このタクシー、地球のタクシーと同仕様のものはほんの一部で、主力はフガオさんたちフンガの顔をした『ロボットフンガ』の背中が乗客を乗せる箱になっていて、その中に二人分の椅子がある、電動式で自動運転のオープンカーとなっている。

雨の日や寒い日も構わずオープンカーで営業するらしい。

今日が晴れてて暖かい日で良かった。

ちなみに古いタイプのタクシーは、乗馬同様、背中に跨がって乗る一人（一匹）乗りタイプで、タイヤや浮力ではなく四本の脚で走行するらしい。

まるで騎手になったような気分を味わえるそうだが、全身へ凄まじい振動と衝撃が走る。振り落とされたら大怪我必至。

例え無事に目的地まで辿り着けても頭痛や目眩、吐き気を起こすだろう。動力はガソリンや軽油に頼っているのだという。

私が乗ったのは新しいタイプで良かった。と一安心。

タクシーは舗装された草原の二車線道路を静かに、しかし颯爽と駆け抜けてゆく。

地平線が見えそうな緑の景色と、澄んだ空気や適度な走行速度で風が気持ちいい。

進行方向左側を見ると、遠くに横に広がって背が高そうな木が一本だけ立っているのが見える。

そのたった一本の太木と、ひたすら広い草原が日時計の役割を果たしているのが、本州の神奈川県から南に500メートルほど離れたこの島を『時原島』と呼ぶらしい。

フンガ星にも神奈川県あるんだ…。

ブファンツ!!

「えっ、何？」

走行中、一瞬だけ右側から凄い風が吹いた。

「ああ、対向車だよ〜ん。それにしても飛ばすなあ、200キロ近く出てたんじゃないの？ ん？ あのロボットフンガはもしや…」

「これそんなに出せるんですか!？」

次の一瞬、今度はドンッ!! と、タクシーが何かにぶつかったような衝撃を感じた。

ウイイイイイン!! ガクンッ!!

私たちが乗るタクシーは急停車。

「ただいま、公衆との接触事故が発生致しました」

ロボットフンガのタクシーは昔のドラえもんの声を更に錆び付かせたような声で案内した。

「うそっ…」

ぞっとした。

私は小さな頃、知らない猫が轢かれ、血だらけになってもがき苦しんでいるのを見て、ショックで大泣きした事がある。

当時の記憶が蘇る。

「ああ、大丈夫だよ〜ん♪♪ やっぱりコイツのロボットフンガだったか〜」

「どこが大丈夫なんですか！！ 轢いちゃったんですよ！？ とうより、やっぱりってなんですか！？」

震えながら振り返ると、20メートルくらい後ろに気を失ったと思われるフンガの姿。よく見ると、頭に金色に輝く王冠のようなものを被っている。

「さっき擦れ違ったのは国王のトノサマフンガのマイカーで、コイツが自分でジャンク品を集めて違法改造した奴だよ〜ん」

で、ウチ等が乗ってるタクシーが轢いちゃったのは、ロボットフンガから振り落とされたトノサマフンガって訳だね〜」

王様轢いちゃった！！！！

というより、王様がマイカーを違法改造するなんて、この国、大丈夫なのかしら？

あれ、もしかして、王様を轢いちゃったってことは…

私、フンガ星来て即刻死刑ですか！！！！？

地球に居たらとうに死んでいたのだから、仕方ないか…。

でも、フガオさんは？

私を案内したがために殺されちゃうの？

「とりあえずコイツの家まで運んでやるか〜」

いや、意識も無いし、こんなに大怪我しているのだから、消防と警察に通報するのでは？ それともフンガ星にはそういう機関がないのかな？

しかしフガオさんは、何ら慌てることなく、血だらけの王様をタクシーのトランクに放り込み、というよりは、乱暴にぶち込み、タクシーは再び走り出した。

そして、ようやく市街と思われるビル群が見えてきた所でタクシーを止め、コイツこの辺に住んでるからと言って、気を失ったままの王様をトランクから引っぱり出して投げ棄てた。

もしかして死体遺棄ですかー！！！！？

それにしても、なんて残酷な事を平気でやるのだろう。もしや、独裁的な王様で、国民から恨みを買っているとか？ でもだからといってこんな事したらいけない。

「フガオさん、この星に救急車はないんですか！？」

「あるよーん」

「なら早く呼んで下さい！ このままじゃ王様死んじゃいますよ！？」

「えー、しょうがないなあ」

フガオさんは渋々救急車を呼び、5分後、王様は搬送されて行った。その後、私はフガオさんが手配してくれた、街にあるビジネスホテ

ルの『人間用シングルルーム』に連れて行かれた。部屋のインテリアは地球にあるビジネスホテルそのものだ。

フガオさんとはそこで別れ、私はこの星に来て初めて『一人ぼっち』になった。

ベッドに腰掛け、溜息を一回つき、そのまま仰向けに倒れ天井を見つめる。

今頃みんな、どうしてるかな？ 私のこと心配してるかな？ もう、死んじゃったことになって、お葬式されちゃったのかな？

地球に居る家族や友達の姿が浮かぶ。

気が付くと、翌日の朝になっていた。

着ていた衣類を洗濯乾燥機に入れてからシャワーを浴び、備え付けの寝間着を着てフロントへ降り、『持ち帰り自由』と書かれたトレイに五部ほど重なった新聞を貰った。

下着がないとスースーして、周囲に人間の男性が居なくてもちよつと恥ずかしい。

フガオさんたちに混じり、バイキングで朝食を摂った。『レトパ』と呼ばれる、レタスのような野菜が主食らしく、ハムやベーコン等の肉類が一切ない。近くに居た毛色がドギツイ、レインボーで横ストライプのフガオさんに尋ねたところ、彼等は草食動物なのだそうだ。

レインボーのフンガさんが私の胸元に差し込んである新聞を見て言った。

「あゝあ、アイツ事故ったのか」

一面記事を見ると

『トノサマフンガ、200キロで大暴走!!』

と書かれていた。

昨日のアレだ…。

記事の大まかな内容はこうだ。

昨日16時頃、トノサマフンガは

『ブルーバードΣ(´)』

と、白いペンキで落書きされ、ジャンク品を集めて組み立てた、決して日産自動車のブルーバードではない自作の違法改造車に乗り時速200キロメートルほどで宇宙港付近の国道を走行していたところ、それに振り落とされ地面に落下。更に反対車線を走行するタクシーに撥ねられ全身打撲の重傷を負った。

事故直後、トノサマフンガを撥ねたタクシーに乗っていた、目撃者でタレントのマヌケフガオと、フンガ星を訪れたばかりの地球人女性が救急隊に通報、病院に搬送され命に別状はないが、トノサマフンガを振り落としてもなお暴走を続けたロボットフンガが宇宙港施

設に激突し、爆発、炎上したが、幸い他に負傷者は出なかった。

トノサマフンガは退院後、宇宙港を管理するステラーエクスプレスから500億円を損害賠償請求される模様。もちろんその500億円は我々の税金だ。

トノサマフンガは入院中にも関わらず警察から事情聴取され、

「前回の凱旋パレードで大勢の国民から空き缶などのゴミを自分に投げられ痛かったので、次回のパレードではゴミが自分に当たらないうちに走り去れるよう高速走行可能なロボットフンガを開発して試運転しているところだった」

と供述した。

なお、マスコミ各社に情報提供したマヌケフガオは200万円ほどの報酬を得た。報酬は先日のパチンコ店事件で課せられた9億円の借金返済に充てるといふ。

というもの。

フガオさん、ネタ売ったんだ…。

ふと思い出したけど、確かあの道、法定速度は時速40キロだったと思う。

160キロもスピードオーバーするくらいなら、もうパレードをやらなければ良いと思うのは素人の考えだろうか。

それはそれとして、私はさっきから気になっている事をレインボー

のフンガさんに、胸の絞まる思いで恐る恐る尋ねた。

冷や汗かきそう。

「あの、マヌケフガオさんと、その地球人女性って、どうなっちゃうんですか？」

「どうなっちゃうって？」

「警察に捕まって死刑になるとか」

「ああ、別に何も無いよ〜ん」

「ええっ！？　だって、国王轢いちゃったんですよ！？」

「だって、車道に転がってるトノサマフンガが悪いんだもん。タクシーが歩道に突っ込んだ訳じゃないし。仮に轢かれた場所が横断歩道だったとしても、そこに信号が無くて、タクシーが法定速度守ってたなら、不注意による飛び出しでトノサマフンガが罰金を払う事になるよん。むしろトノサマフンガは撥ねたタクシーの会社にも修理代払わされるだろうね。税金無駄遣いしやがって。でさ、キミがその地球人女性って奴？」

「はい、実は…。土浦桜と申します」

「ボクチャンはモンテローザだよ〜ん。んじゃあ、トノサマフンガに会ってみるか。ボクチャン、アイツと知り合いだから。ついでにフガオとも」

「えっ！？　そうなんですか？」

モンテローザさんは、ホテルの公衆電話を使って王様を呼び出した。フンガさんは手の形が馬のようで、大きな物を掴めないため電話機に受話器がなく、スピーカーから会話がまる聞こえだ。

こうして私は、これからお世話になるこの国の王様と、アポイントメントなしで会う事になった。

ツチウラサクラフ

私はモンテローザさんに、ホテルから少し離れた大きな病院へ連れられた。病院は同じ市街にあり、タクシーやバスを利用しなくても無理なく歩いて行ける距離だった。

途中、街の様子を観察しながら歩いていた。街そのものは地球とあまり変わらないけど、歩いているのが人ではなくフンガというだけでとても違和感があった。

まるで、小屋から逃げ出した家畜たちが人類を滅ぼして世界を乗っ取ったかのような風景。

なんて失礼な感想だろう。

フンガさんの身体は小さいのに、ビルも道路も地球とほぼ変わらない規格というのには疑問を抱かざるを得ない。さつき道路の反対側を走っていったバスは地球のものそっくりそのままだった。

「モンテローザさん、この星の施設って、私たち人間でも使えるというより、人間の方が使い易そうに見えるのですが、それは何故ですか？」

「ああ、それはね、何年か前にフンガ星に来た最初の人間が地球の技術者で、その技術をフンガに伝授してこうなったのが始まりだよん。人間が来る前は建物は草とか木を組み上げた簡素なものだったんだよね」。

例えばちよつと前まで電車は『電車フンガ』ってというのが走ってて、

フンガの顔した電車自身に魂が込められてたんだよ〜ん。運転士は乗ってなくて魂が車両を制御してるから電車フンガの気分次第で暴走なんか日常茶飯事。それを危惧した国鉄が人間から電車の造り方を教わって、それが走り始めたのは四十年くらい前。

自家用車とかタクシーは今でもフンガの顔して魂が制御してる奴があるよ〜ん。

当時は殆どの物がフンガサイズで、今より遥かに小さくて使えない物ばかりだったよ〜ん」

なるほど、四十年以上も前にフンガ星に人が来て、フンガさんたちに技術を伝授したんだ。

それと、フンガ星の方々の語尾は「よ〜ん」なのかな？ 確かフガオさんもそうだったわよね。

病院に到着し、中に入ると受付フロントで王冠を被ったフンガさんが手続きしているのが見えた。

手続きを済ませると、ピンクのフンガさんばかりの中で目立つ七色のモンテローザさんと人間の私を早速見付け、歩み寄ってきた。

「あつ、どうもどうも〜お二方とも〜」

「こんにちは！」

「ほ〜い」

「え〜っと、土浦 桜さんだね。フンガ星へようこそ〜!!」

早速だけど、これからこの星に住むための手続きをするからあちこち行く事になるよ〜ん。まあ本人がやらなくてもいい面倒な手続きはフガオがやってるからそんなに時間かからないよ〜ん♪♪」

「はい、よろしく願います!」

「じゃあモンテローザ、ありがとね〜♪♪」

「ありがとうございます!」

「ほほ〜い♪♪」

モンテローザさんとお別れして、私たちはオープンカーのタクシーで五分ほど移動し、新時原しんときはらという無人駅、じゃなくて無フンガ駅(?)に連れられた。

周囲は工業地帯で、駅前にぼつりとある五階建てくらいのショッピングセンターがミスマッチ。人はもちろん、フンガさんの姿すらあまり見かけず、何故か二羽のフラミンゴさんがショッピングの従業員を務めていた。

トノサマフンガさんによると、フンガ星では人間のみでなく、様々な生物が地球から移住しているという。それにしても賢いフラミンゴさんだと思った。

「ここは駅係員無配置駅だから、ここから電車に乗って、これからやるDNA情報登録とか切符を買える窓口がある間抜協会まぬけきょうかいっていう

所まで行くよ〜ん」

そう、私がこれから行うのは、フンガ星でお金を支払う時に便利なDNA情報登録というもので、国の機関や銀行でも登録が可能だけれど、私はこれからお世話になるトノサマフンガさんが筆頭株主の鉄道会社で登録する事にした。

これに登録すれば、身体はどこかを端末に触れさせるだけで決済が可能になり、現金を持ち歩く必要が殆どなくなる。フンガ星は地球より少し文明が発達しているようだ。

トノサマフンガさんから株主優待乗車証を一枚貰い、乗り場が一つしかない小さな駅のホームに立つ。

線路を見ると二本のレールがなく、代わりに艶やかな木の板がずっと先まで伸びている。

「これはモノレールなのでしょうか」

「う〜ん、モノレールっていえばモノレールだけど、これはワックスを塗った木の板で出来たレールの上を電車が滑って走るんだよ〜ん。」

進路は予め電車にプログラミングされてるから衝突みたいに無理な力が加わらない限り脱線はほぼない安全性抜群のシステムだよ〜ん。電力は駅とか車庫みたいな所で充電するからパンタグラフとか架線は要らないんだよ〜ん。

これらの鉄道システムはフンガ星、地球とも共通の西暦2000年

に開発された、この小さい会社独自のシステムなのさ」

「なるほど、フンガ星の技術って凄いですね！」

「でしょでしょ、もつと褒めてくれていいよ〜ん♪♪」

死にかけた私の命を救ってくれた医療技術に五十億光年をたった五十日で移動するスペースシャトル、自動運転で会話が出来るタクシーや進路がプログラミングされてる電車。地球と比較して先進性を感じさせられる事の連続だ。

少し待つてると、接近放送もなく、たった1両の凄く小さな電車が入ってきた。ステンレスの車体にオレンジと黄緑の蛍光塗料が塗られた帯が張り付けられたモダンな車両。車両は普通室と、乗客は一名しか入れない特別個室で仕切られている。

チャイムが鳴ってドアが開き、車内に入ると、なんと狭いことでしょう。二人掛けの座席が部屋の隅にあり、車内の大半を占める立席客のためのデッキを挟んで向かい側に一人一人がようやく入れる程度の乗務員室がある。

この車両は同じ線区を走る中でも小さいタイプで、定員は普通室、特別室合わせて十名。最高速度は在来線にも関わらず時速300km。

この路線、水木坂本線の電車はこの先、私たちの居る時原町を出て、水木坂市街の入り組んだ狭い土地を走るため、規格としてはちょうど良いらしい。

シートに腰掛け発車を待つ。

私とトノサマフンガさん以外に乗客はの姿はない。

その間、フンガさんたちのハスキーボイスとは明らかに違う人間の女性の声で、地球の電車にもよくある日本語と英語での自動案内放送が何度か流れた。その後、肉声で案内をした車掌さんも人間の男性の声だった。

この星に来て、初めて人の声を聞いた。話は聞いていたけれど、この星にも人が居ると、自分の耳ではつきり認識できただけで、気持ちがとても軽くなった。

ツチウラサクラ 8

ステンレスの車体にオレンジ色と黄緑色の帯を纏ったモダンな電車は、工業地帯の南端にある始発駅、新時原しんときはらを発車して南へと、まるで飛行機が離陸する時のような勢いで一気に加速し、新幹線のような速さでみるみる雲を追い抜いて行く。

程なくして、景色はただずっと緑色の平野へと姿を変え、やがてビル群に突入した。間拔協会まぬけきょうかいという大都市を目指し、地球では見たことのない特殊なレールの上を滑走してゆく。

ビル群の入口にある次の駅、新ドミノタウンに間もなく停車しようと電車が速度を落とし始め、駅に到着する旨の自動放送が終わった時、トノサマフンガさんは、あつ、そうそうと話を切り出し、私が存命のままフンガ星へ連れられた理由を教えてくれた。

「うーんとね、簡潔に言うと、キミは人間界の神様と、ボクちゃんたちフンガから選ばれた、優れたハートの持ち主だからフンガ星に来て、第二の人生を送る事を許されたんだよーん」

さらりと神様の存在を前提として話をされたら、通常なら動揺するだろう。しかし今現在、地球外生物という奇想天外な相手であるトノサマフンガさんとコミュニケーションを取っているという現実を踏まえ、その存在はごく自然に受け入れられた。

「そうでしたか。しかしながら、私は自身が優れたハートの持ち主などとはとても思えません。もし本当にそうであれば、あのような間違いなどしなかったはずです」

私がつとしつかりしていれば、あんな結果にはならなかった。

「いや、むしろボクちゃんたちはキミのそういう所を評価したんだ
よん」

「え？」

何故愚かな私をこのような場所に連れて来たのだろうか？ いや、愚かだからこそ人間界の神様に見捨てられ、フンガ星で彼らに支配されながら奴隷のように扱われるのだろうか。

『優れたハート』というのは、彼らが気弱な私の意に反する事を指示しても抵抗せず、従順で扱い易そうな人間と想定されたのだろうか。

「キミがどういう理由で力尽きてしまったかはボクちゃんも知っている。そりゃ未練いっぱいだと思うよ。だからこそ、キミはフンガ星で生きる選択をして良かったと思うよん」

「それは、どういう事でしょうか」

「いや別に疑問を抱くような事じゃないよん。単純に、例えば星は違っても、生きてれば未練を晴らすチャンスが来るかもしれないじゃないん」

…特に、君が抱えてるような未練はね。

フンガ星への招待の流れについて、重ねてもう少し詳しく説明すると、人間界の神様と、ボクちゃんたちフンガ星各国の担当者が、優れたハートを持った地球人を選抜してフンガ星へ招待するというの

が最重要事項で、さつき説明した通りだよ〜ん。

んで、日本人が対象者の場合、人間界の神様とフンガ星の日本国王であるボクチャンとで話し合って選抜する。

選抜が終わると、宇宙施設会社選ばれた人間たちのプロフィールと、人間界の神様が指定した彼らの死亡予定時刻が記載されたりリストが送られて、宇宙船の乗組員たちが対象者を死亡寸前に治療や蘇生により救命する。

救命に成功した場合、本人の回復を待つて、フンガ星でのセカンドライフを検討してもらうシステムだよ〜ん。

死亡寸前に迎えに行くのは、万一対象者に自殺されたら困るから、自らの身動きが不能になるまで放置するため。

自殺を試みて負傷等をした人は、人間界の神様との協定で、フンガ星移住の対象外になるよ〜ん。

残念ながら、迎えに行くまでに対象者の命が尽きてしまった場合は、ご冥福をお祈りする事になっちゃうけどね」

なるほど。しかしこれでは私を地球から50億光年も離れたフンガ星へ連れて来るメリットや、自殺者を救命しない理由が曖昧だ。

「わかりました。せっかく救っていただいた命ですので、このフンガ星で精一杯生きてみようと思います。これから数多あまたのご迷惑をおかけしてしまうかもしれませんが、何卒よろしくお願い致します」

「まあまあそう硬くならず、人生エンジョイしてね〜」

トノサマフンガさんやフガオさん、モンテローザさんや宇宙船乗組員のフンガさんたちにお世話になって、彼らが人間たちを支配したり奴隷しようと企んでいるなどとはとても思えない。

うん、きっと大丈夫。奴隷にされるなんて、私の考え過ぎだろう。

それに、命を救ってくれた方を疑うなんて酷く失礼だ。

地球での出来事がきっかけで、私は誰かを信じることに臆病になってしまった。

あの… 私は人間をフンガへ連れて来るメリットや自殺者を救命しない理由を質問しようとした。

『まもなく、終点、間抜協会、間抜協会…』

「あつ、もう着くね」

「あ、はい…」

気がつくと電車は私たちの目的地、間抜協会駅に停車する寸前だった。停車するとすぐに扉が開き、トノサマフンガさんは、お客さん、終点だよーん、と、私を促し電車を降り、電車の前方、車止めの向こうに見える改札口とみられる方へ歩き出した。

お客さん、終点だよ、というフレーズはこの星にもあるという新たな発見があった。

「さて、じゃあ駅の窓口に行って桜のDNAを登録するよーん」

登録すれば残高がある限り、この国での買い物とか決済が自由に出来るようになるよ〜ん」

話の流れや駅や街の喧騒で、とても質問を出来そうにはないと、私は自分に言い訳した。

もう少し積極的な自分になりたいな…。

「さ〜てと、じゃあさっさと登録し〜ちやい〜ましょつ」

地球でも利用したことがあるような雰囲気のかつぷを発売する窓口の自動ドアが開き、列に並ぶと、すぐに私たちの順番が来た。

「いらつしゃ〜い。トノサマフンガと一緒にすることはDNAの登録かい？」

緑色の制服を着た窓口のフンガさんが親し気に用件を訊いてきた。

「そうだよ〜ん。フガオからある程度の情報が行つてると思うから、土浦桜つて名前で検索してみて〜」

窓口のフンガさんは端末機を叩き、すぐに私の名前を見つけた。

「名前あつたよ〜ん」 じゃあ桜ちゃん、これに目線を合わせながら指を押し付けてね〜。これでDNAと静脈に指紋、あと眼の情報をもとめて登録するよ〜ん」

「はい、わかりました」

パソコンのマウスより小さい、情報を登録するためのカメラが付い

た端末機の赤いクリアカラーの部分に指を押し付け僅か一秒後、ピッ！と音がしたのと同時にシャッター音が聞こえた。

「はい、登録完了だよ〜ん♪♪」

いまこの瞬間、国家から桜ちゃんにフンガ星への歓迎の意を込めて三万円のお小遣いが支払われたよ〜ん♪♪

ストアドフェア（SF）、つまりこのDNA認証システム、Yub^ユbita^{ビタ}で使える金額を増やすには銀行口座を開設して預金から引き落したり、うちの会社（湘南太平洋鉄道）の駅の券売機に現金を投入すれば残高が増えるよ〜ん。

銀行口座からYubitaにお金を移す場合は、使い過ぎないように限度額の設定をオススメするよ〜ん♪♪

Yubitaは

『遺伝子情報等による身分証明及び決済等認証システム』

っていう決済とか身分証明手段のひとつに位置付けられてて、地球にある電子マネーみたいな感覚で使えるよ〜ん♪♪ もちろんフンガ星でだってYubitaを使わずに現金での買い物とか取引も可能だよ〜ん」

「はい、わかりました。丁寧なご説明ありがとうございます」

「はいはいどうもね〜♪♪ 今後ともごひいきに〜♪♪」

「はい、失礼します」

会釈をしてトノサマフンガさんと一緒に窓口を出ると、私はさつそく駅の改札機に自分の指を触れ、遺伝子情報等による身分証明及び決済等認証システム（って言ったっけ？）、Y u b i t a を使ってみる。

ちなみにこの改札機、フンガさんと私たち人間が共通して使えるように、機械の上部と下部の二ヶ所に切符の投入口やY u b i t a やICカード用のタッチパネルがあり、ゲートは強行突破されないように横方向に開閉する、人間の胸の高さほどある自動ドアになっていて、挟まれたらとても痛そうだ。

「うわ、すごい！ 開いた！」

指を触れるとピコン！ という音とともに改札機のゲートが開く。それだけで、今までなかった新しい感覚にワクワクして目を輝かせたのが自分でもわかった。

「さて、フンガ星で暮らすための準備が一通り整ったね♪♪ これからは国からの生活補助をしばらく受けられるけど、いつかは自分で生活基盤を築かなきゃいけなくなる。

桜はケーキ屋さんの仕事に興味があるみたいだけど、ボクちゃんはこの星で二千年以上生きてきて、ケーキというものの存在を地球人から聞いたことはあるけど、未だに見たことはない。

そこで、せっかくだからこの星にケーキというものを誕生させてみない？」

「はい！？」

フンガ星にケーキがない事よりトノサマフンガさんが二千年以上生きてきた事に驚いた。

「ん？ どうしたの？」

「いえ、何でもありません！ ケーキ、つくらせてください。ケーキ屋さんになるの、夢なんです！！」

「そりゃ良かった！ じゃあケーキ屋さんになるのを目標に就職活動しよう」

「はい！」

パティシエになってケーキをつくり、それを自分の店で提供して、食べた人を笑顔に、幸せな気持ちにしたい。それが私の夢。

しかし、地球に居たらきつと安定を求めて自分に嘘をつきながら日々を過ごしていたと思う。

本当に、フンガさんたちに助けてもらえて良かったと心から思った瞬間。

謎は多々あるけれど、この星で頑張ってみよう。前に進もう！

そうすれば、夢をひとつ叶えられるかもしれない。

ところでこの駅、なぜ間拔協会まぬけきょうかいというのだろうか？

なぜ『マヌケ』なのだろう？

往路の電車に乗る前から、ずっとそれが気になっていた。

ホテルに戻ったら名前の由来を調べてみようかな。

ううん、トノサマフンガさんに訊いてみよう！ 内気な自分から脱却しなきゃ！

「あの、少々質問させていただけますか？」

「なあに〜？」

「この駅、なぜ間抜協会という名前なのでしょう？」

「へ…？」

「この駅、なぜ間抜協会という名前なのでしょう？」

「あ、うん、聞こえてるよ…」

はわわっ！？ いつも陽気なトノサマフンガさんがまさかの沈黙！！

もしかして触れてはいけない所だったの！？

小さな勇気が大きな後悔を招いてしまった！！

ツチウラサクラ8（後書き）

こんにちは

世界観の説明に終始しているリライフですが次回から人間の新キャラクターが登場し、物語は加速してゆきます。お暇な時にご覧いただければと思います。

ツチウラサクラ9

はわわわわ、どうしよう、私、してはならない質問をしてしまったの！？

質問に困惑を隠せず沈黙するトノサマフンガさんと、動揺し、頭の中がパニック状態の私。

電車内はとても静かなのに、落ち着かない空気が漂っている。

…とりあえず、謝っておこうかな。

「あ、あの、すみません、何かお気に障る事を言ってしまいましたか」

「う、ううん、べ、別に、ただだ、大丈夫だよーん」

そう言うトノサマフンガさんの笑顔は、バイブレーションのようにガクガクブルブルしながら引き攣^{くっ}っていた。

結局、その場を何とかやり過ごす事に精一杯で、質問の答えは聞けないままホテルに戻り、一日を終えた。

トノサマフンガさんと別れてホテルに戻り、立ったまま上を向きながらシャワーでシャンプーを流しながら今日の事を振り返っていた。

Y u b i t a の登録を済ませて国からお小遣いを貰い、ある程度自

由に生活できるようになった。

小さな頃に食べたショートケーキがきっかけで芽生え、いつの間にか忘れかけていたパティシエになる夢も実現出来そうで、とてもワクワクする。

不安に駆られていた心が、フンガ星の皆さんとの出会いを通じて少しずつ満たされてゆくのを実感し、生活は不慣れながらも日々充実しつつある。

今日一日で、希望の光が少し差し込んだ。

でもやっぱり、寂しい。

地球のみんなに、会いたくて仕方なくて、50億年という途方もないような距離にどうする事も出来ず、フンガ星に来てから毎晩、ホテルの部屋で一人泣いている。

「一人ぼっちなんてやだよ、フンガさんたちは側に居てくれるけど、でも、みんなに会いたいよお……」

地球のみんなの顔や思い出が次々と思い浮かばれる。

みんな、元気かな？

シャワーのお湯と混ざって、寂しさや心配、複雑に絡み合う気持ち

が溶け込んだ温かい雫が頬を伝いぼろぼろと流れ落ちてゆく。

翌日、私はフンガ星のことをもつと知ろうと、朝から一人で時原市街を散策していた。

時原島を出て、地球では私の生まれ育った街である、茅ヶ崎^{ちがさき}へ行ってみようと、最寄の本時原^{ほんときはら}駅へ向かった。電車に乗る前に一休みしようと、ホームでベンチに腰掛け、温かい缶コーヒーを口に含んでいた。

フンガさんは五本の指がないため、缶は人間は地球同様にタブを指で起こせば開けられる。フンガさんは自販機に付属している開栓用の道具に缶をレバーがツメに引っ掛かるように固定し、レバー両手で握り下ろせば開けられる。

コーヒーを飲んでいる間、地球と同じ二本の鉄のレールの上を走る電車を何本が見送った。

本時原駅に来る電車は、オレンジと緑、青とクリーム色のものが主力で、色も形も地球に住んでいた頃よく利用していた東海道線や横須賀線にそっくりだ。

しかし、乗っているのはピンク色の動物ばかりで、その光景がとても奇妙。

建造物は人間とフンガさんが共同で利用出来るように寸法は人間用の規格で、扉などの可動装置は開閉に力が必要なため、人間より微力なフンガさん用に小さく設計されている場合もある。

地球より文明が発達しているフンガ星では、宇宙旅行は当たり前、生活インフラでは指紋、静脈認証による決済や施錠、水力で走る車など、私にとって物珍しい技術の宝庫だ。

そんなこの星で、旧式の鉄道や地球にあるものと同じブランドの社名などを目にとると、少し安心する。

食文化の違う外国で日本産のお米を食べた時のような感覚だろう。

しかし、異なる部分はあるものの、フンガ星の地形が地球とよく似ているというのは奇妙でもあった。

「本時原駅をご利用いただきまして、ありがとうございます！ まもなく6番線、伊豆大島方面より、試運転列車が到着致します！ 危険ですのなるべくホームの内側へお下がり下さい」

アナウンスは、きゃぴきゃぴした女性の声だった。

ガシャンガシャン、ガシャンガシャン、くふおおおおん。

まもなく目の前へステンレスの車体に水色と群青色の帯を纏った綺麗な電車が入って来た。これまで見送った電車より遥かに静かだ。

緑色っぽいUVカットガラス越しに車内を覗いてみる。

蓬色の壁面、草原のようなグリーンの床には小さな黄色い花のような模様が描かれている。他に木のように茶色い椅子と吊り革、出口の扉は切り株のような肌色で、その上にモニターが二台。車内はまるで森のようだ。後ろの方に二両連結されている二階建ての車両は、

さきほど見送った電車たち同様、そして地球の電車同様、きつとグリーン車だ。

「こんにちは！ お客さま、お一人ですか？」

「はいっ！？」

「あ、はいっ！？」

電車を観察していると、左斜め上から不意に先程のきゃぴきゃぴした声で話し掛けられ、びくつとした。

口に含んだばかりのコーヒーを吹き出さなくて良かった。

ベンチに腰掛けたままふと見上げると、身長が150センチくらいの栗色でポニーテールの可愛い駅員さんが、にこにこしながら私を見ていた。

「あわわ、ごめんなさい、びくくりさせちゃいました！？」

「ええ、少しびくくりしてしまいました。ですが、お声をかけて頂いて嬉しいです。私、フンガ星に来たばかりで、人間の方を目にする事が滅多にないものでして」

「そうなんですかあ。私は去年の今頃フンガ星に来たんですけど、今でも人間の方とお話することはあまりないんですよ。だから嬉しくて、つい話し掛けちゃいました！ 服装で判ると思いますが、私、本時原駅とその周辺の駅で働いてる友部水希ともへみずきっていいいます！もし良かったら、お友達になりませんか？」

言って、友部さんは名刺を差し出してくれたので受け取る。

『日本鉄道株式会社 友部水希 Japan Railway Company Mizuki Tomobe』

と表記されている。

あ、地球で行方不明者続出事件の被害者としてニュースに写真が出てたあの人だ。

「はい、こちらこそ、よろしくお願いします！ あ、私、身分を証明出来る物は持ち合わせていませんが、土浦桜と申します」

人との出会いが嬉しくて、声が裏返りそうなくらい高揚してしまっ
た。

「えっ！？ どうしたの！？ 泣いちゃってる！？」

「私、友部さんがフンガ星で初めての友達なので、嬉しくて…」

「そうかあ、フンガのみんなは温かいけど、人が居ないのは寂しいもんね！ 私のことは水希って呼んでね！」

フンガ星に来て初めてのお友達が、本当に嬉しくて、無意識のうちに流していたんだ。

「…自殺なんか、しなくて良かった」

「ん？ 何なに？」

「いえ、なんでもありません」

「そっか！　ならオーライッ！」

ところでさ、この会社の湘南支社が営業地域分割化で湘南会社、つまり湘南太平洋鉄道に吸収合併されるんだけど、良かったら湘南会社の採用試験受けてみない？　分割化を機に鉄道だけじゃなくて、未開拓の部門に挑戦しようって方針があるから、桜ちゃんがやりたい事にも挑戦出来るかもよ？」

「未開拓の部門、ですか。私、ケーキ屋さんになりたいんです」

「おおっ！　いいねえ！　フンガ星にはケーキ無いし、生クリームも、牛乳も無い。完成したら私も食べたい！　あっ、ちょうど良いところに駅長だ。おい！！　えきちょー！！」

白い制服を纏ったフンガさんが水希さんの呼びかけに反応し、こちらへ軽くスキップしながら来た。

「ほいほい♪」

「駅長、ケーキって知ってる？」

「計器？」

「いや、ケーキっていう地球の洋菓子なんだけどさ、甘くて凄く美味しいの！　どう、食べたくない？」

「おごってくれるの？」

「重役が平社員にたかるとか、どんだけケチなんだよってツツミたくなるけど、社員食堂でタダで食べれるようになるかもよ?」

「ほほう、そりゃグウだね」

「だってさ桜ちゃん！ 良かったね！」

「えっ！？ 何！？ 話が見えないよ」

「駅長はこれから私が作る企画書に黙ってハンコ押せば良いから」

「なんだって！？ この前水希の書類に黙ってハンコ押したら百万するギター買わされたじゃないか！！」

「まあまあ、今度のはビジネスチャンスだからっ！！ キリッ！
！」

言って水希さんは額に手を当て、言葉通りキリッと敬礼した。

「そんな事言って今度は家でも買わす気か!？」

「あつ、電車来るから放送しなきゃ！ 桜ちゃん、またね！」

「あ、はい、さようなら」

水希さんは駅長さんを軽く遇あしひってホームの向かい、5番線側へ歩いて言った。

「おいコラー！！ 逃げんなー！！」

駅長さん、なんだか水希さんのお尻に敷かれているようだった。

「桜ちゃんっていつのかい？」

「あつ、はい」

駅長さんに急に話しかけられて少しびっくりした。

「良かったら、水希と仲良くしてくれる？ ケーキつてのも作ったりしてみてさ」

「はい、逆に私が仲良くしていただきたいくらいです」

「そつか！ そりゃ良かった！ 水希はああ見えて寂しがりだからさ、同じ人間の桜ちゃんが居てくれれば凄く心強いと思うんだ」

駅長さんは自分の事のように満面の笑みで喜んでいる。

「駅長さん、良い人、いえ、フンガさんですね」

「おおっ！ 見る目あるねえ！！ そりゃなんてったって本時原駅長だからね！！」

いいなあ、こういう上司とか、アットホームな職場環境。この会社、受けてみようかな。

「駅長さん、私、この会社、受験してみようと思います」

「おおっ！！ そりゃ良いこった！ 機会があつたらぜひ一緒に働こうじゃないか！」

「はい！ 私、頑張ります！！」

「気合いだー！！ エントリーは湘南会社のホームページか履歴書の郵送で出来るよーん」 わかんない事あったらいつでも駅に聞きに来てね」

「はい、ご親切にありがとうございます！！」

よし、まずは採用試験に向けて頑張るぞ！！ 気合いだー！！

作中の『日本鉄道株式会社』は、かつて実在した同名の組織とは異なります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1341/>

リライフ

2011年9月4日21時37分発行